

# 失敗しない「ジネンジョ」づくり 10のコツ

- ①水はけの良い畑を選ぶ
- ②肥料分が無い土を芋誘導用の栽培容器に入れる
- ③健全な種芋を利用する
- ④芽が出た種芋を丁寧に植える
- ⑤植えた後の土壌の乾燥に注意する

- ⑥肥料は8月まで効けば大丈夫
- ⑦肥料は畝部に施用する
- ⑧土が乾きすぎないようにポリマルチをする
- ⑨通路は雑草対策のため防草シートをする
- ⑩病害虫は早めに対策をする

## ①水はけの良い畑の選び方(指針p.3~5)

深さ50cmまで掘り、深さ10cm程度に水をためる。翌日、水が無くなっていけば水はけは良好である。



穴を掘って水を入れたところ  
↓  
一晩たって水が無ければ水はけが良いほ場

## ②栽培容器(パイプ)に入れる土(指針p.6)

芋を誘導する容器に入れる土は肥料分が無く、土の粒が荒くないものを用いる。養分があると芋が奇形となり、土の粒が荒いと芋の肌も粗く枝分かれやすくなる。



水はけが悪く、水がたまると芋が腐りやすい

## ③良い種芋(指針p.7~8)

種芋は重さ40g以上で健全なものを使う。最初は種芋にある養分を使って育つ。芋に病気が付いていると腐敗したり、ウイルスにかかっている種芋は大幅な収量減となる。



栽培容器の中に養分が流入すると芋が黒ずんだり枝分かれたりして正常に伸びなくなる

## ④芽だしの方法と定植(指針p.9~12)

種芋の首部を折り、切り口を乾かす。水分を含ませたおがくずや川砂を詰めた箱に種芋を入れ芽を出させる。催芽床の表面は乾いてから水をやれば十分である。水をやり過ぎないように注意する。つるが10cm程度出た種芋を選び、根を切らないように定植する。太いつるが出た種芋を利用すると良い。



ウイルスにかかると葉が変形(アブラムシ類がうつす)  
ウイルスにかかった芋を種芋にすると収量は4~6割減収!

## ⑤植えた後の土壌の乾燥に注意(指針p.12)

根が張るまでは、土を乾かさない。土が乾いていればかん水することが大切。乾かしてしまうと初期の生育が悪くなる。



8~10本出る根を植えるときに傷めたり、乾かさない



生育初期の根うまく根がつけば白い根が伸長していく

## ⑥施肥(指針p.13~18)

ポリマルチをすれば、肥料が有効に利用でき、施肥量は、窒素量で15g/m<sup>2</sup>。基肥に専用肥料を使えば、追肥はしなくて良い。9月以降は、地上部(葉やつる)にためた養分が芋の肥大に利用される。



通路部  
防草シートをすれば雑草が抑制され、草取り作業がらくに

## ⑦施肥位置(指針p.16)

根は浅めで、通路まで伸びないため、畝部に施肥する。根が伸びてこない通路に肥料があっても利用されない。



畝部のマルチ  
奥: 不織布マルチ  
前: 白黒マルチ  
不織布マルチは水蒸気を通すので土が乾きやすい(湿害対策)

## ⑧ポリマルチによる土の水分安定(指針p.19~20)

畝がほどよく湿っているときにマルチングして土の水分を安定させる。目安は土を手で握ってパラパラと崩れる程度が良い。



停滞水による根傷み(根が褐変)  
↓  
芋の肥大は不良

## ⑨防草シートで草対策(指針p.21)

雑草が生えると芋に吸ってほしい養分がとられ、雑草を抜けば、大切なジネンジョの根が切れてしまうことになる。早めに畝に白黒マルチ、通路には防草シートを敷いて雑草対策をする。



湿害による分岐



コガネムシ類の幼虫食害

## ⑩こまめに観察し早めの病害虫防除(指針p.22~23)

長期間保存した堆肥を使うとコガネムシ類の幼虫が芋をかじることもあるので注意する。アブラムシ類(ウイルス病)、ハダニ、炭疽病、葉渋病に注意してこまめに観察し適期に早めに防除する。



炭疽病



葉渋病